

航空士官学校時代—終戦

上原区隊長の自刃

島田 純一
60期25-8
(坂戸市)



終戦前夜

最早、日本本土での飛行訓練は不可能であった其れまでは初等訓練は、高萩の飛行場であの二枚羽根の赤トンボで、そして爆撃機の訓練は今俺の住んでいるこの辺一帯が、坂戸の飛行場として使用されていたのだ。

だが59期、60期の一次生は、満州に渡り訓練を受けていた。予科の時の戦友菅田君（台湾出身）は、満州に渡るべく舞鶴港を出港直後、爆撃に遭い尊い命を亡くしたと後で聞く。花開く事無く蕾のまま、散りにし友はさぞかし無念で有ったであろう。戦争の悲惨さが身近にひしひしと迫って来る。そんな日の続く8月14日、夜の自習時間に上原区隊長が「貴様等は何にも迷う事は無い。黙って俺について来い。此の胸の血が証明する。」この時は何の意味が解らなかつた。

玉音放送

8月15日、天皇陛下の重大放送が有るから生徒は大講堂に集合の命令…12時少

し前であった。全員大講堂に集合して12時丁度、演台中央に置かれたラジオから、陛下より終戦の詔書（玉音放送）が発表された。耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、万世に泰平を開かんと欲す。…陛下の放送が終わると同時に、皆拳を眼に当て号泣した。

続いて総理の放送が始まると、間もなく一人の将校が演壇に上がり、軍刀を引き抜きラジオのコードをぶった切った。「貴様等は泣くのを止めよ。俺に就いて来い。戦いはまだこれからだ。別命有るまで寢室で待機せよ」と言われるままに皆肅々と寢室に引き上げた。

そして色々な議論が噴出した。中でも国体について。わが国は神州不滅の詔勅があり、絶対に負ける事は無いのだ、と教育され固く信じ込んでいたのだ。因に、その詔勅とは、…豊葦原の千穂秋の瑞穂の国は天地と共に窮まり無かるべし…と言うものであり、戦争に負けるその時は日本の国が無くなる時、終戦の詔勅はこの天上無窮の詔勅に反する。天皇陛下の御心からではない。陛下を取り巻く奸臣の輩がなすものだ。重臣の近衛、平沼等をぶった切れ。そして陛下を擁して今一戦、最後の一人になるまで戦うのだと、壮絶な熱気に包まれていた。

決起

そしてこの時になり、上原区隊長が『俺の胸に付いたこの血が証明する』と言われた意味が解った。つまり14日、陛下の玉音放送がされないように録音盤奪取を謀り、警備にいた近衛師団長を切り、その反り血を浴びたものであった。

此の夜は一睡もせず国体について、そし

てこれからの取るべき道について語り明かした。翌日、明野原の陸軍戦闘機が、浜松の海軍航空隊が戦闘開始したとのビラを撒いているとの話が伝わってきた。

私も後れを取ってはならぬと、有る者は武器庫から軽機関銃を持ちだし、また或者は数Km離れた狭山の弾薬庫から、機関銃の弾を持ち帰り寝室の下に隠した。そして他の者は武道場に駆け寄り59期、60期、一次生徒の納めて行った軍刀を我先に持ち帰り、いざ出撃に備えた。そして頭の毛を切り落し封筒に詰め故郷の父母に送った。当時死ぬ事は怖くなかった。ひたすら御国の為に一命を捧げる事に、生き甲斐を持っていたのだ。

17日の朝、小林中隊長が「皆そんなに騒がないで、静かにしてくれ、戦争は終わったのだ。あれは真に陛下のお言葉なのだ。頼むから武器を棄ててくれ」と言う。翌日も同じ事を涙流しながら訴える。何やらこれは本当かもしれぬと、思うようになった。そして上原区隊長は天皇に反逆する者として憲兵隊に追われる身となったのだ。

自決

19日、意を決した上原区隊長は、雄健神社の玉砂利の上で潔く切腹し、同期の荒武区隊長に介錯され此の世を去った。

この話しを聞き我々は先を争うように、雄健神社の御前にひざまずき、泣き伏した。そして血の付いた玉砂利を幾つも幾つも、大事に持ち帰り、一夜を過ごしたのだ。何と国の為一筋に己が命を貫き通した、立派な軍人いや人ではなかったか。

上原区隊長の亡骸は、飯能・天覧山の麓に在る能仁寺に手厚く葬られ、暫くの間線

香の煙りが絶える日は無かったと聞く。(平成6年1月記す)

筆者注：本文は飽くまでも本人の記憶に基づくもので、人によっては話が前後したり日時が異なっていると指摘される方もおられる。正しい情報をお持ちの方はご一報下さい。